

つどい 第20号

発行日：令和7年11月

こんにちは!野木町交流センター「野木ホフマン館」です。
今回の「つどい第20号」でお届けするのは、概ね次のとおりです。

- 野木ホフマン館の近況と事業
- 野木町煉瓦窯のおはなしその⑳
- 自然豊かな渡良瀬遊水地その⑲

【野木ホフマン館の近況と事業】

ホフマン館に聳(そび)えるメタセコイア並木も紅葉の時期を迎えます。見ごろはその年によって、多少変わりますが、紅葉したメタセコイア並木と野木町煉瓦窯のコラボ写真はいかがですか。今年は、11月14日(金)から12月7日(日)までメタセコイア並木のライトアップを午後5時前後から6時まで実施いたします。11月22日(土)、23日(日)はライトアップ時間を午後8時まで延長して、皆様のご来館をお待ちしております。



植物観察会



押し花でハートのペンダント作成講座



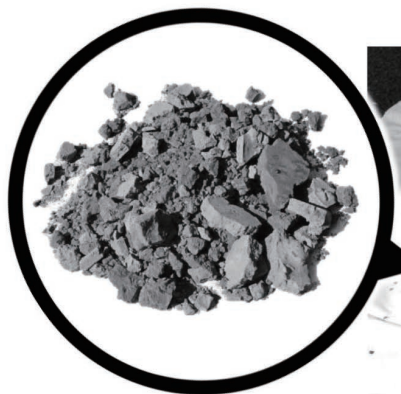
野鳥観察会(ツバメのねぐら入り)



陶芸教室作品

野木町煉瓦窯のおはなし その②⑩

今回は、手作業による煉瓦のつくりかたをご紹介します。

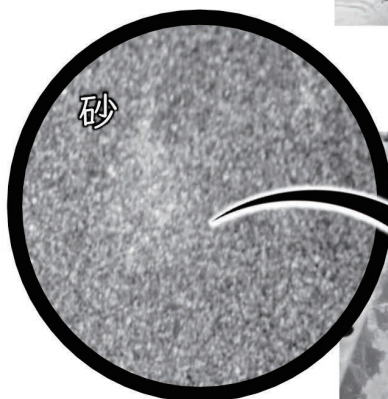


- ① 採取した粘土を細かく砕きます。

渡良瀬遊水地から採取した粘土を使っています



- ② 砕いた粘土をふるいにかけて、細かい粒をよりわけます。



- ③ 細かくした粘土と砂を混ぜます。

思川の砂を使っています



- ④ 水を加えて、よく混ぜます。

- ⑤ 水と粘土がよく混ざったら、粘土と水がなじむまで、しばらくおいておきます。
これで「煉瓦原土」ができました。



⑥ 煉瓦原土を木枠に詰めます。

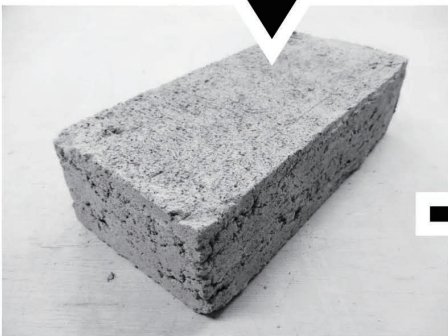


⑦ 隙間なく詰めたら、表面の煉瓦原土を切り取って平らにします。



⑧ 表面が乾いたら木枠を外します。歪みや凸凹などを均して形を整えたら、「煉瓦素地」の完成です。

煉瓦素地は急に乾かすと割れてしまうので、時間をかけて全体を乾かします。



⑨ じゅうぶんに乾燥したら、焼成します。
今回は陶芸用の電気窯で焼きました。

自然豊かな渡良瀬遊水地 その⑱

渡良瀬遊水地の産業 ～湿地性植物産業～

渡良瀬遊水地(谷中村)の地場産業には、前号で紹介しました漁業の他に渡良瀬遊水地堤内外で自生している湿地性植物を利用した製造業がありました。

1. よしづ編み

栃木市(旧藤岡町)周辺のよしづ編みは、江戸時代後期、古河藩の政策で旧谷中村で行われたのが始まりと言われています。よしづ編みが盛んになりだしたのは、大正12年に起きた関東大震災で需要が急増し、昭和に入ってからのことです。赤麻・石川沼が埋積されるに伴い、周辺に生えてきた「ヨシ」が原料とされました。戦後安定的に出荷されることになり、渡良瀬遊水地のよしづは全国生産量の約70%を占めるようになりました。

よしづ生産者戸数は、昭和52年には203戸であったが、昭和55年には中国産よしづの大量輸入に加え、翌昭和56年、57年の冷夏をきっかけに、生産者、生産量ともに減少の一途をたどっています。

2. スゲ笠編み

スゲ笠編みの歴史は古く、江戸時代より越中(富山県)と並んで全国的な産地でありました。昭和初期頃まで、赤麻沼付近の沼沢地に群生していた野生のスゲを原料としていたがその後、需要増加が著しく水田にカサスゲを栽培するようになりました。昭和35年頃までこの地方のスゲ笠は農業用として、関東一円に出荷されていました。

3. マコモ簾

赤麻沼周辺に自生していたマコモは、飼料や肥料としての利用が一般的であったが、昭和4年頃にマコモ簾が赤麻村で発案され、簾の生産が中心になりました。遊水地北部の赤麻・中根・部屋・石川・帯刀の各集落に生産が集中し、昭和10年統計では製造戸数約300戸、月生産150万枚でありました。

渡良瀬遊水地の近況

野鳥観察会「ツバメのねぐら入り」を渡良瀬遊水地第1調節池内で8月7日に行いました。昨年は残念な結果でしたが、今年の「ツバメのねぐら入り」は、ヨシ原の上空にどこからともなく、ツバメが飛んできて、日の入り過ぎには何万羽というツバメがヨシ原の上を飛び、その速さ、数の多さは圧巻でした。また、何万羽の群れのムクドリも乱舞も見事でした。来年も期待したいです。

参考文献

「渡良瀬遊水地成立史」「渡良瀬遊水地の時」より

野木町交流センター

(野木ホフマン館)

開館日：火曜日～日曜日

9：00～18：00

(国民の祝日開館、翌平日閉館)

〒329-0114

野木町大字野木3324-10

☎ 0280-33-6667